

教育と舞台芸術を融合したプログラムで、
自分の人生を、
当事者として生ききる力を育てる



相川秀希氏 サマデイグループ CEO

1979年に「早稲田塾」の運営で創業したサマデイグループは、現在、企業や教育機関への人材開発研修事業と「音楽座ミュージカル」という舞台芸術創造事業の二つを軸に展開している。教育と舞台芸術を融合したプログラムが好評を博し、名だたる企業・団体が続々、固定客になっている。

母の一言で塾をスタート

早稲田塾を創業したのが、大学在学中とお聞きしましたが？

相川CEO そうです。私が20歳のとき、母（故相川レイ子氏）と50%ずつ出資してサマデイを設立し大学受験を専門とする「早稲田塾」をスタートしました。

きっかけは「塾をつくりなさい」という母の一言です。私が浪人中に

さまざまな勉強法を編み出す様子を見近で見ていた母は、「息子がビジネスをするのに塾はピッタリだ」と考えたのでしよう。

——舞台芸術創造事業というのは、いつから？

相川CEO 「音楽座」という劇団を引き受けてほしい」と母に依頼があったのです。最初は出資だけをしていただけですが、このままでは再建できないと感じた母は、1987年

に「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」（右写真中央の壁貼りの写真が公演ポスター）で、なんと脚本や演出まで担当し、大成功を収めたのです。

また、母は教育とアートを融合させた人材育成の必要性を唱えていました。私は私で、偏差値で牛耳られている知識偏重の大学受験に対するアンチテーゼがありました。

他人との比較であたかも自分の価値が決まってしまうような受験観が、どうしても性に合わなかったのです。

「偏差値を捨てる教育」で塾経営を行うことを決意し、塾生の「唯一無二の自分の人生を、当事者として生ききる力」を育む塾をつくらうと、あらゆる試行錯誤を続けました。

具体的には、塾生が「自分のやりたいこと」や「熱中できること」を探究し、自らで学びとる力を鍛え、

一度きりの自分の人生を、他人に委ねたり誰かに阿（おま）ったりするのではなく、自由自在にデザインできるような人材を育てるプログラムを考えていったのです。

その一環として、音楽座ミュージカルの舞台創造メソッドを塾のカリキュラムに活かした、実験的な講座を数多く開発しました。舞台を鑑賞したり、ミュージカルの稽古場の雰囲気味わうといった感動体験を通じて得られる感性は、人の本質的な知性を引き出すと考えたからです。

——当時の学習塾界では、異質な存在だったのでは？

相川CEO 教育業界の関係者からは「一体なぜこんなことをやるんだ？ 受験に必要なのでは？」と、訝（いぶ）しげに見られていたと思います。

ところが、偏差値教育に対する限界が叫ばれるようになると、局面は

一変します。異端とされた早稲田塾は、現在では大学受験における総合型選抜(旧AO入試)で、全国随一の実績を誇るようになりました。

2014年に、早稲田塾の経営権は譲渡し、私の手から放れています。早稲田塾の教育事業で培った独自の知見は、これからの時代を生きる全世代の教育に活かせると考え、2015年「日本アクティブラーニング協会」を立ち上げ、全国の企業や教育現場にプログラムを提供しています。

サマディグループの現在の教育事業や教育システムの開発は、40年以上に亘るアートと脱偏差値による塾



サマディグループの研修は、円盤型の「正解のない問い」に向かうことで、感性や直観をフル稼働させながら学ぶアクティブラーニングメソッドになっている。

経営が基になっているのです。

Z世代の感性と本気で向き合う

「教育業界はいま大きく変化していますが、どのような未来を考えていますか？」

相川CEO 一つ確実に言えるのは、これからの時代は、変化のサイクルもスピードも、加速度を増すということです。

私が未来を考える上で、大きなヒントとなった問いをご紹介します。

「うちわ↓扇風機↓エアコン」は、イノベーションの3段階活用の事例です。エアコンの次にくる、活用の4段階は何だと思えますか？

どう答えますか？ 咄嗟に答えるのは難しいかもしれませんね。ちなみにこの問いに、即座にこんな風に答えた実際の例があります。「和室が涼しい。4段階は原点復帰ですね」

この回答は、20代の学生によるものです。私が注目したのは、回答の内容よりも、問いを投げかけた際の学生の様子でした。年配者やキャリアのある社会人にこの手の問いを投げかけると、多くの場合、自分を優秀に見せたいのか「いやあ、ちよつと難しいですね」という反応になります。

ところが、若い人は、そうした街い(てい)のようなものが圧倒的に少ないのです。

先の学生も、何気ない様子で自然にコメントしてくれました。そんな姿を見るにつけ、「感性における反射速度」が、いわゆる「Z世代」と言われるデジタルネイティブたちの凄みなのだと思ひ知らされます。

Z世代とは、現在10〜20代の若者を指しますが、世界では、この世代がすでに3分の1を占め、今後の社



「音楽座ミュージカル」という舞台芸術創造事業を運営。読売演劇大賞、紀伊國屋演劇賞の受賞歴と共に、舞台芸術の中で最高の賞の一つとされている文化庁芸術祭賞を3度受賞している。



本社には、「オンラインによる企業研修の撮影・配信」、「各種セミナーの配信」、「YouTube動画の撮影」などを行うスタジオを完備している。

会に多大な影響を及ぼす存在だと考えられています。彼らは、スマートフォンがあるのが当たり前で、SNSで世界中とつながり、溢れんばかりの情報の渦に身を置いて育った世代です。ビジネスモデルの変換において、これまでの世代とは価値観も行動様式も全く異なるZ世代の動向を無視することはできません。

Z世代の感性と本気で向き合うことが、激変する時代における方向性を見出すヒントになる

まさに教育業界のメインのターゲット層になりますね？

相川CEO 彼らに必要なものをダイレクトに提供する役割がある教育業界は、大きなモデルチェンジが求められることになるでしょう。いずれにしても、Z世代の感性と本気で向き合うことが、激変する時代における方向性を見出す大きなヒントになるのではないのでしょうか。

にもかかわらず、日本の企業は、この世代に対する感性が非常に鈍く、世界の企業と比較して、彼ら彼女らへの取り組みが圧倒的に遅れていると言われています。こうしたガラパゴス体質のままの企業は、厳しいことを言えば、近い将来必ずしつぺ返しが来るはずですよ。私の著書『面接・面談の達人』目には見えない力を鍛える125

面接・面談の達人

目には見えない力を鍛える125の問い

相川秀希

「正解のない問いで、独自の視点を深める究極の思考トレーニング！」

『面接・面談の達人』相川秀希著 (幻冬舎) 2022年3月25日発行

の問い」に掲載されている125の問い全てに、Z世代の実際の回答も書いてあります。Z世代の本質を理解するための一助になるのではないかと思います。

正しい道理を行動に示す

「社名「サマディ」とは、どのような意味があるのでしょうか？」

相川CEO サンسكريット語で「三昧。取り憑かれるくらい夢中になつて取り組む」の意であり、母の命名です。

私が経営者として歩んできた道の隣に絶えず母の存在があり、会社経営におけるかけがえのないパートナーであり、大切なことに気づかせ



てくれる人生のメンターでした。そんな母は2016年に他界し、墓石には「三昧境」と刻まれています。

——教育、舞台芸術と夢中に取り組んできたお母さまと相川CEOの経営に、うってつけの言葉ですね？

相川CEO「三昧境」は仏教用語なのですが、「経営」という言葉もまた、仏教用語であることはあまり知られていません。

「経」は「筋道や道理を通すこと」であり、「営」はそれを「行うこと、行動に表す」ことです。修行僧の教育では、経営を「織物」に喩えて説明するのだそうです。「経」は縦糸であり「正しい筋道や道理」を示し、「営」は横糸に喩えられ「自由に変化する様」を表すのだとか。

これを会社経営に置き換えれば、縦糸は、「時が経っても変わらないもの」、つまり会社の理念や企業の価値観。そして、横糸は「時代に合わせて変えていくもの」であり、その時々々の旬を掴み、新たなことに挑戦し続



「仕事に全霊で没頭し、
その楽しさとやりがいから
生まれたものを
社会に還元する」

けることだと言えます。

そして経営者には、「正しい道理を行動に示すこと」が求められるのだと思います。ただし、それに苦行のように取り組むべきではありません。仕事という人生最大のエンターテイメントに全霊で没頭し、その楽しさとやりがいから生まれたものを社会に還元する。これが理想の経営者の姿ではないでしょうか。そんな姿を目指しながら、私も日々精進できると願っています。

株式会社サマディ

【本社】東京都千代田区六番町12番地6
 【設立】1979年 【資本金】101百万円 【従業員数(グループ)】60名(2020年3月末現在) 【事業内容】人財開発・研修事業／舞台芸術創造事業／教育コンサルティング事業／教育システム企画・開発事業・次世代教育事業
 【グループ会社】株式会社ヒューマンデザイン／株式会社アドミッションズオフィス

きらぼし銀行 町田支店